



Title	東アジア臨床哲学会議を終えて
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 203-208
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100174">https://doi.org/10.18910/100174</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【第4回東アジア臨床哲学会議の記録】

## 東アジア臨床哲学会議を終えて

堀江 剛

2024年1月27-28日、第4回東アジア臨床哲学会議を大阪大学臨床哲学研究室主催で開催した。場所は大阪大学中之島センター、趣旨・プログラムは次の通りである。

## 哲学の再定義：東アジアの活動から

現代の「哲学」は、古典研究の枠組みを超えた多様な展開を見せている。生活する人々と関わる中で、人々とともに哲学する「哲学プラクティス」がある。あるいは「世界哲学」という名前で、近代西洋的な枠組みを批判的に拡張・解体しようとする試みがある。東アジア臨床哲学会議でも、これらの新たな哲学に関連して多くの報告や議論が積み重ねられてきた。第4回目を迎えるにあたって「哲学とはどのような活動か」について議論したい。参加する東アジア各国・各地域における哲学の活動を踏まえ「哲学の再定義」を試みたい。

1月27日（土）

開会挨拶・来賓紹介：堀江剛（大阪大学）

発表1：作為倫理行動的存在現象學還元：在心理治療中の實踐為例

Existential-Phenomenological reduction as an ethical move: As practiced in psychotherapy

■ 発表者：李維倫 LEE Wei-Lun（國立政治大学）

■ 司会／コメンテーター：李樺 LI Hua（中山大学）

■ 通訳：張政遠 CHEUNG Ching-yuen（東京大学）

発表2：非历史的利与弊：论末人的生存方式

The Use and Abuse of A-historical: On the Way of Being of the Last Man

■ 発表者：楊小剛 YANG Xiaogang（中山大学）

■ 司会／コメンテーター：朱剛 ZHU Gang（中山大学）

■ 通訳：廖欽彬 LIAO Chin-ping（中山大学）

発表3：Philosophical Life in the Posthuman Age

ポストヒューマン時代の哲学的人生

■ 発表者：이영의（李英儀）RHEE Young E（東国大学）

■ 司会／コメンテーター／通訳：望月太郎（大阪大学）

発表4：理解“文科”：“人文学科（humanities）”概念的源流、语言多样性与哲学翻译

Understanding "wenke": the history of the concept of humanities, language diversity and philosophical translation

■ 発表者：潘大為 PAN Dawei（中山大学）

■ 司会／コメンテーター：ほんまなほ（大阪大学）

■ 通訳：張政遠 CHEUNG Ching-yuen（東京大学）

1月28日（日）

発表5：從高達美式視角反思健康照護

Some Reflections on Healthcare from a Gadamerian Perspective

- 発表者：蔡偉鼎 TSAI Wei-Ding（國立政治大学）
- 司会／コメンテーター：堀江剛（大阪大学）
- 通訳：廖欽彬 LIAO Chin-ping（中山大学）

発表6：「社会のなかで生きる哲学」とはどのようなものか？

What does "philosophy living in society" look like?

- 発表者：山本和則・松川えり（Café Philo）
- 司会／コメンテーター：西村高宏（福井大学）
- 通訳：韓仁傑 HAN Renjie（大阪大学）

発表7：震災と言葉：被災地における哲学対話の可能性

The Disaster and Words: The Possibilities for Philosophical Dialogue in Disaster-affected Areas

- 発表者：西村高宏（福井大学）
- 司会／コメンテーター：小西真理子（大阪大学）
- 通訳：韓仁傑 HAN Renjie（大阪大学）

テーマ討論：哲学の再定義

- 司会：堀江剛（大阪大学）
- 討論者：  
李維倫・蔡偉鼎（國立政治大学）・張存華 CHANG Tsun-Hwa（輔仁大学）  
楊小剛・潘大為・朱剛・李樺・廖欽彬（中山大学）  
李英儀（東国大学）・張政遠（東京大学）  
西村高宏（福井大学）・山本和則・松川えり（Café Philo）
- 通訳：廖欽彬・張政遠・河璘 HA Rhin（大阪大学）

閉会挨拶：朱剛（中山大学）

この国際会議は、臨床哲学研究室の教授であった浜渦辰二さんが「東アジア哲学会議」として始めたものである。その後、隔年で日本・台湾・中国の関係大学が順番に開催し（2回目以降は名称を「東アジア臨床哲学会議」に改め）、今回4回目となった。参考のために、過去の大会のテーマ・開催時期・今後の予定などをここに示しておく。

第1回：現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ（2018年1月28－29日、主催：大阪大学）

第2回：現象学、人文臨床と倫理学（2019年10月19－20日、主催：台湾・國立政治大学）

第3回：医療哲学、カウンセリングと倫理学（2021年11月27－28日、主催：中国・中山大学）※

第4回：哲学の再定義（2024年1月28－29日、主催：大阪大学）

第5回：テーマ未定（2026年3月、主催：台湾・輔仁大学）

※ コロナ禍のためZoomによる開催となった

第4回の特徴として、これまで日本・台湾・中国の人々によって構成されてきた参加メンバーに加え、韓国から発表者・討論者を招いたことが挙げられる。これによって、名実ともに「東アジア」の哲学・臨床哲学に関わる人々が集う国際会議となった。また今回の会議では、発表者に対して次のような「問い」を提示し、事前にそれぞれのコメントを送っていただいた。それをテーマ討論で披露し、議論した。

問い：なぜ私は哲学するのか。私にとって哲学とは何か。

- 現象学的志向を持つ臨床心理士として、私の心理ケアの仕事は現象学的哲学の恩恵を受けてきた。現象学的哲学は、心理的ケアのプロセスにおいて、ケアする側とされる側の経験に関わり、適切な行動を導き出すことを可能にする人間理解の方法を示唆している。その意味で、ケアという行為に寄り添う「ケアの哲学」という名の実践哲学があってもいいのではないかと考えた。しかしその後、哲学分野における「実践哲学」とは、行動や実践についての哲学的考察を指し、人間同士の付き合い方に関する「倫理学」、集団生活の実践に関する「政治哲学」、人間と神との関係やその実践に関する「宗教哲学」などが含まれることを知った。このような定義は、アリストテレスが、万物の根本を記述する最初の哲学である理論哲学と、人生の幸福や意味について、また何が善であり、何を考えるべきかという実践哲学を区別したことにヒントを得ている。この観点からすれば、実践哲学としてのケアの哲学は、ケアという意味合いを持つ様々な実践活動の哲学ということになる。しかし、30年近く携わってきた私自身の心のケア活動に立ち返ってみると、上記の定義では、哲学的な考察と実践的な行動とを分けて考えることになり、私の実践において哲学が提供する役割を十分に説明できていないと感じる。私の経験に近い実践哲学の定義は、哲学的考察自体が実践の活動であり、哲学的考察自体が実践を構成要素として含むものである。明らかに、実践活動としての哲学は「実践」について考える哲学とは異なる。ケアの哲学の場合、後者は「ケアについて」考える哲学であり、ケアの普遍的な意味合いや原理を求めるものであるのに対し、前者は「ケアのために」考える哲学であり、文脈の中でのケアの経験について考えるものである。(李維倫)
- 均質で終末的な人間の存在において、哲学とは何を意味するのだろうか。ChatGPTのようなAIの急速な発展によって、やがて人間は、ますます多くの労働から解放される。もし人間が大量失業に苦しまず、より少ない労働で豊かで快適な生活を送れるようになるという希望を持つならば、そのような生活の中で「何をすべきか」という問題に直面せざるを得ない。それが肉体的欲望であれ、見栄による新たな欲望であれ、果てしない欲望そのものに飽き飽きするだろう。基本的な欲求を維持するだけであれば、それほど努力しなくても満たされるのであれば、私たちは欲望を再生産するための機械にすぎないのか。歴史学・政治学・経済学・心理学・生物学を問わず、「目的」という概念がますます意味を失いつつある。そのような時代に私たちは生きている。人間の行動を説明するために、これらの学問分野では様々な欲望、あるいはそれに還元できる動機が語られる。哲学だけは「目的」の概念を放棄することができない。目的概念の意義が失われている大前提のひとつは、コジェーヴやフクヤマが言うように、かつては大きな実践的推進力をもっていた歴史的目的が、ほとんど完成してしまったことである。政治体制が異なっても、今日の世界は本質的に「最小限の近代国家」で構成されている。国家の正統性は国家の安全保障、つまり国民の権利が守られるということに基づいている。私にとって哲学は、近代国家の正統性と矛盾する「大きな物語」を誤ったものとして特定し、啓蒙哲学が明示した歴史の目的の正統性を説明し主張することである。それが、私にとって唯一の真の「大きな物語」であった。その一方で、啓蒙哲学の成功は、必然的に歴史が終わった後の終末的な人生につながる。私たちは、欲望の流れの乗り物になるか、いわゆる「インセンティブ」の競争的なゲームに次から次へと参加することになる。おそらく、古代ギリシャ哲学の美德（アレテー／徳）の実現は、thymos（気概：自ら進んで困難に立ち向かっていく強い意志・気性）によって

推進されなければならない。しかしthymosはそれ自体精神ではない。それは人間が単なる欲望の機械になるのを防ぐための道具にすぎない。ゲームは単なるゲームであって、それ自体が目的ではない。これを認識するために哲学が必要なのだ。誰かがゲームの核心を様々な「小さな物語」という砂糖で包み、私たちを終わりのない競争に駆り立てる。このとき、私たちはリラックスした気持ちでゲームに参加することはできる。しかし、競争の中で精神的な自立を達成する方法はない。これを心に留めておく必要がある。(楊小剛)

- 私にとって、哲学とは「哲学する」ことである。哲学することと哲学を学ぶことは同じではない。哲学を学ぶことは東西の哲学思想を学ぶことである。哲学することは「する」という動詞に焦点を当てる。その意味で、哲学とは、反省的考察を通じて人生や自然を批判的に分析する一種の実践である。

現在、少なくとも韓国では、哲学は学生の間では人気がない。法学・経営学・経済学・行政学・医学などに押され、優秀な学生は誰も勉強したがない。しかし、私が高校生の頃は優秀な学生が哲学を志望していた。今、世の中は哲学の常識化を目指している。人々は〈第一哲学の瞑想〉を書いた哲学者（デカルト）に興味を持っているが、わざわざ読もうとはしない。私にとって哲学とは、哲学しようとする場であり、日常生活について「なぜ・何」を問う場である。(李英儀)

- 医学哲学は、健康と疾病の問題を哲学的に考察する学問である。それは医学と哲学の二大領域にまたがる横断的分野であり、近年最も急速に発展している国際的な哲学フロンティアの一つである。

研究ルートから見ると、哲学研究には主に4つのタイプがある。第一は、歴史的な哲学理論や思想概念を主な研究対象とする歴史志向型、すなわち哲学史研究であり、広く思想史研究とも呼ばれる。第二に、文献重視型、すなわち、ある特定の哲学文献を研究対象とするものである。ここでいう文献とは、通常、哲学者の原著を指すが、演説・翻訳・解説・解釈なども含まれる。第三は個人志向で、哲学者個人の思想を対象とする。第四は問題志向で、哲学的な問題を中心に議論することを意味する。ここでいう問題とは、大きな問題であることもあれば、専門的な傾向のある特定の局所的な問題や小さな問題であることもある。

上記の4つに共通する特徴は、哲学と現実の具体的で複雑な文脈との間に距離を置く傾向があることである。本論文の著者らは、医学哲学の分野における研究経験に基づき、哲学的研究の第5の道筋として「現実世界のために哲学を行う」ことを提案する。

医学は科学であると同時に科学以上のものでもある。医学哲学の関心事には、医学における科学的・技術的要素だけでなく、より重要なこととして、医学における生きた人間も含まれる。第一に、健康と病気はすべての人間に関係し、すべての社会と文化において人間の実存的条件の基本的な部分である。人間の生命と存在への関心を原動力とし、その出発点とする健康と病気への哲学的探究は、本質的に仕事の下位区分ではなく、哲学のあらゆる分野に関わり、人文学的学問としての哲学の問題意識そのものに直接言及する。第二に、筆者が臨床研究の仕事から得た忘れがたい経験は、病院やベッドサイドでの現実の生活、病気、死、そして眠れぬ夜こそが、理論研究にとって最も必要であり、かつ欠落しやすい「場」であるということである。第三に、最も根本的な意味で、哲学的研究は抽象的な概念や長い専門用語の集積ではなく、世界を説明し変革するための強力な武器である。アカデミックな哲学の欠点のひとつは、テキストによる演繹を過度に重視し、人が何をなすべきかを論じることに多大な労力を費やすが、人が何をなすべきか、ましてや、人が何をしているのか、なぜそうしているのかを理解することにはほとんど、あるいはまったく注意を払わないことである。

医療分野における人間の問題は、個人のレベルでの臨床医学、地域や社会のレベルでの公衆衛生、そしてグローバル化の時代における人間の運命共同体に照らしたグローバル・ヘルスの3つのレベルに区別することができる。この3つのレベルすべてが、医学哲学の関心範囲であり、議論し探求する必要がある、实际的に重要で緊急性の高い健康や病気の問題が数多く存在する。実社会のための哲学は、医学哲学と哲学全体がその意義に気づき、長寿を得るための唯一の方法である。(潘大為)



- 哲学するということのうちには、その哲学が成り立つための条件の吟味や、その思想がもたらす可能性についての吟味が含まれている。そうであれば、哲学の実践においても同じように、その実践が成り立つ条件や可能性についての吟味が必要である。それがないと、哲学としては不十分なものになる。

発表で紹介してきた事例でいうと、イベントを開催するための資金面の検討は、その実践を成り立たせるための条件の吟味に対応する。対話以降の現場との継続的な関わりは、その実践がもたらす可能性についての吟味に対応するといえる。そして対話の合間のコミュニケーションは、私たちにとって、その両方についての反省的思考を促す契機となっている。このようなクライアントや現場との関わりのプロセス全体が「哲学する」ということであり、それはすなわち「社会のなかに生きる哲学」のリアルな姿でもある。(山本和則・松川えり)

- 個別の人に向かってする哲学。各個人がもつ微妙な襞を削り取らない。「言葉というものの真のはたらき」は、何よりも「生身の個」にこそその照準が絞られなければならない。被災地における「てつがくカフェ」もまた、その当初からこの「生身の個」に、言い換えれば「だれかある特定の他者に向かってという単独性ないしは特異性の感覚」をもっとも重視するものでなければならない、と感じていた。なぜなら、ここで言う「てつがく」とは「普遍的な読者」に対してではなく、対話を通して「個別のひとに向かってする哲学（臨床哲学）」を想定しているからである。個々人のあいだの〈ずれ〉を繊細に選り分けていくような「個別的な言葉遣い」がそれぞれにあてがわれるのでなければならない。自分自身の「言葉を回復する」という営みがそのまま「個別な実存」、さらには「腑に落ちる内面を拵える」ことにも繋がるのではないか。〈対話〉は各個人が抱く意見の「小さな差異」を確認しながらゆっくりと忍耐強く進む。

風化に抗う：〈硬い問い〉を抽出し、共有する。〈伝える〉から〈ともに考える〉へ。粘り強く災害という問題およびそこから見えてくる課題に臨み続けていくためには、災害の直接的な当事者だけではなく、幅広く、それに関心を寄せるすべての者が何十年先までもしっかりとそのことについて根本的に問い直し、また考え続けることを可能にするような、ある意味において耐久性に優れた〈問い〉をそれぞれのうちで丁寧に仕上げていくことが極めて重要である。災害には、発災から時間が経つにつれて、その裏側で〈風化〉という問題がどうしてもつき纏う。災害の問題や、またそこからみえてくる課題を後世にしっかりと繋いでいくには、一度、災害を〈伝える〉という発想から離れる必要がある。直接的な被害を被った狭い意味での当事者によって、被災地で経験したその惨状やそこから見えてきた問題を、それ以外の者に向けて一方的に〈伝える〉というアプローチからだけで〈風化〉という難題を乗り越えられるほど事態は単純ではない。災害もしくは防災に関わる活動は、これまで、いかにしてその被害や課題を後世に伝えるかということに軸足を置きすぎてきたのではないか。そのため、伝える側と伝えられる側といった一方向的な関係性ばかりが際立ち、またそれだからこそ、被害について語り、伝えることのできる者(あるいはそれを許される者)の資格や当事者性の問題などが余計に問い質され続けることになる。そしてそのことが、災害の問題や課題への関わり方において、被災地／被災地外といったかたちでその立ち位置や経験値の違いをいたずらに際立たせ、災害についてともに〈考える〉という雰囲気を著しく阻害してきたようにすら思われる。

割り切れなさ、わからなさを生きる。災害という事実を、自然の脅威に晒され、翻弄された〈当事者＝被災者〉の直接的な経験のうちに閉じてしまってはならない。むしろ災害は、被災の内外、被災の当事者であるかないかに関わりなく、インフラや社会制度の脆弱性にはじまり、政治・経済・宗教・法律・歴史、そして多くの人々の感情や思考・思想・哲学・倫理・芸術、そして私たちの死生観をも含めた価値観全体にまで及ぶとてつもなく広範で、しかもそれぞれの領域において根本的な問い直しを迫ってくる。そうであるからこそ、災害を多層的で、しかも複雑多岐にわたる〈出来事〉として捉え返す必要がある。それぞれの人に、それぞれの立ち位置および問題関心からの〈出来事〉が立ち上がる。そしてそこでは、きれいごとや一筋縄では済まされないような「割り切れなさ」や「わからなさ」が蠢く。(西村高宏)

コメントは研究領域や立場によって異なり、それぞれの「哲学」に対する多様な見解が示されていて興味深い。しかし、実際のテーマ討論では、哲学の「再定義」をめぐる噛み合った対話は生まれず、各自の哲学に対する思い入れが独白のように繰り出されるだけであった。このあたりは、企画者（堀江）の反省すべき点である。とはいえ、討論の中では東アジア各国における「哲学プラクティス」の活動や、そのためのいくつかの工夫についても聞き知ることができた。

東アジアで、哲学対話や哲学相談といった活動がどれほどの広がりを見せているのか。私たちはそれを互いに十分知らない。話を聞いていると、こうした活動が意外と盛んに行われていることが分かった。東アジア臨床哲学会議も、まだまだ「学術的」な色合いを残している（それゆえ哲学的な独白の場になってしまっている）が、今後はもっと「対話」による交流の場に仕立てていくことが課題となるであろう。

ところで対話といえば、この会議で常に難しさを抱えているのが使用言語の問題である。日本語・中国語・英語がチャンポン状態で飛び交うこの会議で、いつも通訳としてお世話になっている廖欽彬・張政遠の両氏には、感謝してもしきれない。同時に、分かる／分からない言語が交雑する雰囲気も、決して悪くはないと感じる。互いに慣れない英語で統一するよりも、言葉を含めた文化の多様性をそのまま映し出し、それを「哲学する」国際会議の魅力がある。

（ほりえ・つよし）